

<プログラム>

W.A.モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

セレナーデ 第13番 ト長調 K.525「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

Serenade No. 13 in G Major, K. 525, "Eine kleine Nachtmusik"

楽譜

- | | |
|------|--------------------------------------|
| I. | Allegro |
| II. | Romannce : Andante |
| III. | Menuetto : Allegretto |
| IV. | Rondo : Allegro |

<休 憩>

W.A.モーツァルト

Wolfgang Amadeus Mozart

セレナーデ 第7番 ニ長調 K.250(248^b)「ハフナー」

Serenade No. 7 in D Major, K. 250(248^b), "Haffner"

楽譜

- | | |
|-------|----------------------------------|
| I. | Allegro maestoso – Allegro molto |
| II. | Andante |
| III. | Menuetto – Trio |
| IV. | Rondeau : Allegro |
| V. | Menuetto galante – Trio |
| VI. | Andante |
| VII. | Menuetto – Trio I - Trio II |
| VIII. | Adagio – Allegro assai |

<プロフィール>

客演コンサートマスター　ライナー・ホーネック　Rainer Honeck

1961年オーストリア生まれ。1981年ウィーン国立歌劇場及びウィーン・フィルハーモニー管弦楽団に第一ヴァイオリン奏者として入団、1984年には同歌劇場管弦楽団のコンサートマスター、1992年にはウィーン・フィルのコンサートマスターに就任。

ソリストとしてはM・ヤンソンス指揮ウィーン・フィルとドヴォルザークの協奏曲、D・ガッティ指揮ウィーン・フィルでベルクの協奏曲、R・ムーティ指揮のもとモーツァルトの協奏交響曲等を協演。録音では、小澤征爾指揮リムスキー=コルサコフ「シェヘラザード」、クリスティアン・ティーレマン指揮R.シュトラウス「英雄の生涯」、またドヴォルザーク、メンデルスゾーンの協奏曲をプラハにてチェコ・フィルと録音、シューベルトのヴァイオリンとピアノの全作品、モーツァルトの協奏曲2枚組などがある。

室内楽では1989～1999年ウィーン・ヴェルトウオーゼンの創立メンバー、1982～2004年ウィーン弦楽ソリストンのリーダーとして活躍、2000年以降は、アンサンブル・ウィーン、ウィーン・ベルリン室内管弦楽団でも活発な活動を行う。近年では指揮にも力を入れており、名古屋フィル、紀尾井シンフォニエッタ、読売日本交響楽団、マルメ交響楽団などに招かれている。オーストリア国立銀行貸与の1709年製ストラディヴァリウス”ex-Hämmerle”を使用。



神戸市室内合奏団Kobe City Chamber Orchestra

1981年、神戸市によって設立された神戸市室内合奏団は、実力派の弦楽器奏者たちによって組織され、神戸、大阪、東京などを中心に、質の高いアンサンブル活動を30数年に亘って展開している。弦楽合奏を主体としながらも、管楽器群を加えた室内管弦楽団としての活動も活発で、バロックから近現代までの幅広い演奏レパートリーのほか、埋もれた興味深い作品も意欲的に取り上げてきた。また定期演奏会以外にもクラシック音楽普及のための様々な公演活動を精力的に行っている。

1998年、巨匠故ゲルハルト・ボッセを音楽監督に迎えてからの14年間で演奏能力並びに芸術的水準は飛躍的な発展を遂げ、日本を代表する室内合奏団へと成長した。毎年のシーズンプログラムは充実した内容の魅力あふれる選曲で各方面からの注目を集め、説得力ある演奏は高い評価を受けている。

内外の第一線で活躍するソリストたちとの共演も多く、2011年3月の定期演奏会でのボッセ指揮によるJ.S.バッハ「ブランデンブルク協奏曲全6曲」の名演のほか、メンデルスゾーン「第三交響曲スコットランド」、ベートーヴェン「第四交響曲」などがCD、LPとしてリリースされている。また、2011年9月にはドイツのヴェストファーレンクラシックスからの招聘を受けてドイツ公演を行い、大成功を収めている。2013年度からは、日本のアンサンブル界を牽引する岡山潔が音楽監督に就任し、ボッセ前音楽監督の高い理念を引き継ぎ、合奏団のさらなる音楽的発展を目指して、新たな活動を展開している。

定期演奏会

次回定期公演

神戸市室内合奏団　定期演奏会

時流を読む者 ― 正統から独創を築き上げた人々 ―

春。ロマン派交響曲の誕生

指揮：石川 星太郎
ピアノ：ソフィー=真由子・フェッター

R.シューマン：交響曲 ト短調 WoO29「ツヴィッカウ」

W.A.モーツァルト：ピアノ協奏曲 第17番 ト長調 K.453

R.シューマン：交響曲 第1番 変ロ長調 Op.38「春」

 神戸公演
2017年3月9日（木）19時開演
神戸新聞 松方ホール

 東京公演
2017年3月11日(土) 14時開演
紀尾井ホール

神戸市室内合奏団 定期演奏会

時流を読む者 ― 正統から独創を築き上げた人々 ―

第137回定期公演

祝典のセレナーデ

ザルツブルク、晴れの舞台の彩

2016年11月29日（火）19：00開演

神戸文化ホール　中ホール



助成：文化庁文化芸術振興費補助金（舞台芸術創造活動活性化事業）



主催：（公財）神戸市民文化振興財団・神戸市

プログラム・ノート

中村 孝義（大阪音楽大学名誉教授・音楽学）

今回の神戸市室内合奏団定期演奏会には、ウィーン・フィルのコンサートマスターとして名を馳せるライナー・ホーネックが客演する。これまで彼らはすでに2度共演を重ねているが、ホーネックが3度目の招きに応じたのは、この合奏団との相性の良さを彼自身が感じ取っているからだろう。今回はコンサートマスター席から合奏団をリードするとともに、後半の「ハフナー・セレナーデ」では、ヴァイオリン・ソロの腕前もたっぷりと披露してくれることになっている。楽しみなことである。

ところで今日演奏されるのは、モーツァルトの手になるセレナーデと呼ばれるジャンルの作品。このジャンルは、この頃のザルツブルクでは、貴族や裕福な市民が、そのステイタスを社会に誇示するために、何らかの理由（例えば結婚式、誕生日、命名祝日、大学修了式など）のための祝賀会で、その宴を彩るための機会音楽として依頼し、作曲されたものである。当時のザルツブルクではセレナーデ熱が非常に高かったと伝えられている。モーツァルトもこの時代の職人的音楽家の例に漏れず、基本的には注文を受けて作曲する人だったので、セレナーデや同類のディヴェルティメントを数多く作曲している。ただこうした機会音楽の常として、その機会が過ぎればお蔵入りしてしまうのが普通で、その後は二度と日の目を見ることもなく、忘却の彼方へと沈んでしまうのが、こうした機会音楽というものの命運であった。

だが今日も演奏されるように、モーツァルトのものは、そうした並の機会音楽のような命運をたどらず、現在もモーツァルトの音楽の中でも、極めて魅力的なジャンルの一つとして多くの人に聴かれる存在になっている。ここでもモーツァルトという作曲家は特別だったのである。本年の神戸市室内合奏団の年間総合テーマは「時流を読むもの―正統から独創を築き上げた人々―」となっているが、まさにその時代に流行していた音楽を、小賢しい策を弄さず真正面から堂々と手がけながら、出来上がってみれば、他の人には及びもつかない、モーツァルトならではの魅力（これを独創といわずして何といおう）が至る所にちりばめられている、というところに、まさに正統から独創を築くモーツァルトの天才が示されているのである。今日はこうした音楽に常日頃から最も近い所で活躍するホーネックが、その力や経験を駆使してその真価をとことん味わわせてくれるであろう。

W.A.モーツァルト(1756～1791) セレナーデ 第13番 ト長調 K.525「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」

子供から老人まで、ベートーヴェンの「運命」交響曲の第1楽章第1主題（つまりダダダダーンのことだ）を知らない人がほとんどいないのと同じように、モーツァルトのこの作品の第1楽章を耳にして、モーツァルトの作品だということは知らないにしても、今まで一度も耳にしたことがないと言う人を探す方が難しいのではないだろうか。

それくらい人口に膾炙されているのが、現在「アイネ・クライネ・ナハトムジーク」として知られる、セレナーデ第13番ト長調である。とにかく一度耳にすれば忘れることができないような、清々しくも雅やかで、美しい雰囲気を一杯に湛えた印象的な音楽である。先にも述べたように、何らかの祝賀行事などのために作曲されるセレナーデとしては少し異例なことに、管楽器類を全く含まず、楽章数もわずか4つと決して大きくはない。その意味では、モーツァルトがザルツブルク時代に盛んに作ったセレナーデの規範からは大きく逸れる作品である。実はこの作品が作られたのは1787年のウィーン時代の円熟期、かの歌劇「ドン・ジョヴァンニ」を作曲していた頃のことであり、ザルツブルク

で流行していたものとスタイルの点で異なっているのは当然かもしれない。ただこの作品には不思議な点がいくつかある。その一つは、セレナーデというジャンルが、注文を受けて作曲される機会音楽であるにも拘わらず、注文主が誰か、これがどのような契機で作られたのかが全くわかっていないと言うことだ。しかも現在は4楽章構成として知られるこの作品が、モーツァルトの自作品目録には、第1楽章と第2楽章の間にメヌエットをもう一つ加えた5楽章構成の作品として記載されているという点だ。いったい誰がそのメヌエットを抜き去ったのか、あるいは紛失してしまったのか、誰がこのように美しい作品を、どのような機会のために依頼したのか、その不思議な点を解明する糸口が未だ全く見つからない、秘密のヴェールに包まれているのがこの作品なのだ。現在は弦楽合奏で演奏されることが圧倒的に多く、新全集でもそれを支持しているが、弦楽四重奏＋コントラバスで演奏されることも可能としているように、編成の点についても確定的なものがない作品でもある。あれやこれやと謎の多い作品ではあるが、そんな秘密が明らかにされなくとも、またたとえ一つの楽章が欠けていたとしても、とにかくこの作品が今に残されたことを我々は喜ぶべきだろう。

第1楽章は、生き生きとして親しみやすい第1主題（この主題から全楽章の主要主題が導き出される）と繊細な表情を持つ第2主題によるソナタ形式楽章。第2楽章は、ロマンツェと名付けられているように、温かく豊かな歌に満ちた3部形式による緩徐楽章。ハ短調による中間部が全体を引き締める役割を担っている。第3楽章は間に歌謡性に満ちたトリオを挟んだ明確なリズムを刻むメヌエット。そしてフィナーレは、軽快で遊び心に溢れるロンドで締めくくられる。

W.A.モーツァルト セレナーデ 第7番 二長調 K.250(248b)「ハフナー」

モーツァルト時代のザルツブルクでは、前述したように様々な祝賀行事に合わせてセレナーデを演奏することが一つの流行となっていたために、彼自身も注文を受けて結構多くの作品を作曲している。その中でも今日演奏される「ハフナー・セレナーデ」は、規模、編成ともに最大のもので、彼のセレナーデの代表作といっても過言ではないだろう。

ザルツブルク市長を務めた名門のハフナー家とは父レオポルトの時代から懇意の間柄であったが、当時の当主ジークムント・ハフナー2世は、モーツァルトと同年齢ということもあり親しい間柄であった。ハフナーは、彼の妹マリーア・エリーザベトが婚礼をあげるのに際して、その前夜の祝宴（1776年7月21日）を大いに盛り上げるため、懇意のモーツァルトにセレナーデの作曲を依頼したのであった。

この作品も当時ザルツブルクで流行していたセレナーデのスタイルや特徴を、ほぼ踏襲していると言ってもよい。つまり、弦楽器に加えて、木管、金管も多数使用される大きな編成を取ること、6つから9つという多くの楽章を持つこと、協奏曲風の楽章を含むこと、3楽章程度のメヌエットを含むこと、響きに豊かな変化があること、と言ったことが挙げられる。この作品が、編成や規模の点でいつもにも増して大きくなったのは、依頼主の財力の大きさや結婚式という特別の機会のためのものであったこと、また依頼主がモーツァルト自身と親しい間柄であったということが、自ずと彼に作曲に力を込めさせた結果であろうと思われる。

こうした機会音楽というものは、その役割が終われば、たいていは自ずと消え去ってしまう運命にある。実際この頃に作曲されたこの種の作品で、今日までその命脈を保っているものはほとんどないといってもよい。しかしこの作品を始めとしてモーツァルトのこの種の作品が、今日もお演奏される機会が多いのは、単にモーツァルトのものであるということだけにとどまらず、やはり比類のない傑出した素晴らしさを備えていたからにはかならない。特にヴァイオリン・ソロが活躍する協奏曲風の部分は、時にここだけ取り上げて単独で演奏されることもあるくらいに魅力的なものである。もちろんそれだけでなく、各楽句に込められたモーツァルトならではの生き生きと躍動する生命感、豊かな歌謡性に満ちた旋律の比類のない美しさ、大規模ながら、見事な統一感をもったまとまりの良さ、あるいは各楽章における形式的にも工夫の行き届いた完成度の高さなど、その素晴らしさは枚挙に暇がないほどだ。これこそ、音楽学者ド・サン＝フォアによって「モーツァルトの〈ギャラント期〉のクライマックスをなす作品」と評されるように、それまでの管弦楽作品の集大成を成すとともに、今後の円熟期の交響曲などに至るための大きな布石となる作品となったのだった。

第1楽章は、壮麗なアレグロ・マエストーソの序奏に始まり、主部も堂々とした推進力を持つソナタ形式楽章。第2楽章から第4楽章までの3つの楽章は、独奏ヴァイオリンが活躍する協奏曲風楽章だが、ト短調という翳りを帯びた調性を取るメヌエットの第3楽章や、クライスラー編曲による独奏用小品としても親しまれる第4楽章のロンドが魅力を発散する。第5楽章はギャラント・スタイルによるメヌエットだが、ニ短調によるトリオが、得も言われぬ緊張をもたらす。第6楽章は変奏曲の手法を取り入れたロンド形式による緩徐楽章。第7楽章は、二つのトリオを持つこの作品3つ目のメヌエット。そして最後の第8楽章は、印象的な序奏に始まり、一気に駆け抜けるようなアレグロ・アッサイのロンド・ソナタ形式による主部がつづく。

----- コンサートマスター ライナー・ホーネック

第1ヴァイオリン	谷口 朋子	幸田 さと子	黒江 郁子	萩原 合歓	前川 友紀
第2ヴァイオリン	西尾 恵子	井上 隆平	中山 裕子	二橋 洋子	奥野 敬子
	石田 紗樹				
ヴィオラ	亀井 宏子	中島 悦子	横井 和美	三木 香奈	
チェロ	伝田 正則	山本 彩子	田中 次郎		
コントラバス	長谷川 順子	ポール・ウェール			
フルート	清水 信貴	横田 美緒			
オーボエ	中根 庸介	若木 麻有			
ファゴット	佐々木 威裕	吉田 文子			
ホルン	村上 哲	矢野 めぐみ			
トランペット	秋月 孝之	岡野 圭児			